

「殺害の時間の問題」再考

佐藤 広大

本稿のテーマは行為の同一性と個別化である。そこで、本稿では「ある行為がいつ起こったのか」という問いについて考えることになる。

たとえば、私が東京の三田キャンパスで頭を殴られ、頭に違和感を覚えながら埼玉の自宅に戻ったところ、三田キャンパスで殴られたことが原因で死んでしまったとしよう（この手の話は陰惨な例ばかりで嫌になってしまうのだが）。この場合、私はいつ殺されたことになるのだろうか（あるいは、どこで殺されたことになるのだろうか）。殴られたときだろうか。死んだときだろうか（その場合、私は死ぬまでずっと殺され続けていたことになるのだろうか）。あるいは、そもそも殺すという行為など存在してはいなかったのだろうか。

本稿のタイトルにも含まれている「殺害の時間 (the time of a killing) の問題」の出自について確認しておこう。D・デイヴィドソンが行為を行為者の身体運動であると考えてのに対して、J・J・トムソンは行為を身体運動からその結果が起きるまでであると考えて。そのような対立の中で、デイヴィドソンの行為の捉え方に対して、トムソンからなされた反論というのが「殺害の時間の問題」である。たとえば、私が殴られて数時間後に死んだ場合、行為を身体運動であると考えているデイヴィドソンは私が殴られた瞬間に殺害という行為が終わっていたと考えなければならない（殴られた時点で私はまだ死んでいないにもかかわらず）。デイヴィドソンの行為の捉え方に従って、殴るという行為を殺害という行為と同一視することが看過できぬほどに不合理だと感じられるのであれば、トムソンの提出した「殺害の時間の問題」はデイヴィドソンの行為の捉え方に対する反論となっているだろう。現にデイヴィドソン陣営も自分たちの行為の捉え方から生じる奇妙さを払拭しようと努めている。

本稿の目標は、デイヴィドソンとトムソンがどのように対立しているかを明らかにすることである。デイヴィドソン陣営に与する柏端達也によって試みら

れた「殺害の時間の問題」の奇妙さの払拭に対して、トムソンが納得することはないだろうし、納得する必要もないだろう。トムソンが、「殺害の時間の問題」を通してデイヴィドソンを批判する際に依拠しているのは、たとえば「(被害者が)死ぬ前に(その被害者のことを)殺した。」という文が持つ奇妙さであり、この奇妙さをデイヴィドソン陣営が消し去ることができないために、トムソンに反論され続けてしまう。ただし、「死ぬ前に殺した。」という文が奇妙さを持つからといって、そこからただちにトムソンの行為の捉え方が正当化されるわけではないし、デイヴィドソンの行為の捉え方が否定されるわけでもない。そして、動詞の中には、存在者としての行為と対応していないものがあるかもしれないというのが本稿のポイントである。

本稿の構成は以下のようになっている。まず、1章では、柏端(1993)を取り上げ、本稿の流れに沿う形で再構成していく¹。1・1節では、本稿の主題である「殺害の時間の問題」の内容について確認しなおす。「殺害の時間の問題」に関して、1・2節では、殺害は射撃よりも長い時間領域を占める射撃とは別の行為であるとする立場(トムソン)を、1・3節では、射撃と殺害は同じ行為であるとする立場(デイヴィドソン)を紹介する。最後に1・4節では、デイヴィドソンの立場に与する柏端によって、遡及性という観点と他動性という観点からなされた「殺害の時間の問題」の奇妙さを払拭しようする試みを取り上げる。

私の見立てでは、柏端の分析は「殺害の時間の問題」が抱える奇妙さの由来の一側面を浮かび上がらせたという点で一定の評価を与えることができる。しかし、「殺害の時間の問題」をデイヴィドソンに突き付けたトムソンは柏端の分析をもってしても「殺害の時間の問題」が抱える奇妙さを消し去ることはできていないと、つまり「殺害の時間の問題」がデイヴィドソンの立場に対する反例としていまもって機能していると不満を口にし続けることが可能だろう。2・1節では、トムソンが「殺害の時間の問題」を用いてデイヴィドソンをどのように批判したのか確認する。2・1節で確認されたトムソンの批判をもとに、2・2節では、トムソンが、柏端によってなされた「殺害の時間の問題」の奇妙さの払拭に対してどのように批判しうるのか示す。最後に、2・3節では、以上の考察をもとに、行為という存在者と対応していないような動詞が存在する可能性を示唆する。

1. 柏端 (1993)

1.1. 「殺害の時間の問題」の概要

デイヴィドソンが採用する行為の同一性基準に対して、反論としてトムソンらから「殺害の時間の問題」が提出された。本節では、柏端が、江戸川乱歩の『サーカスの怪人』をもとに創作した殺害事件の例²を通して「殺害の時間の問題」の内容を確認しなおす。

とある殺害事件が発生した。月曜日の午前11時、サーカスの団長である笠原氏の撃った弾丸が息子の正一（しょういち）に命中する。午後2時（射撃から3時間後）、正一は死亡する。この殺害事件について、個別的な出来事を指示する単称名辞を用いると、以下のように言うことができる。

[1・1] 正一が死ぬ3時間前に、笠原氏による正一の射撃があった³。

この殺害事件について、以下のように言うこともできる。

[1・2] 笠原氏は正一を撃つことによって正一を殺した。

ここで、デイヴィドソンも与するアンスコム的な同一性テーゼ（ x がFすることによってGしたのであれば、「 x がFしたこと」とも「 x がGしたこと」とも記述可能な1つの行為が存在するというテーゼ⁴）を踏まえると、[1・2]から、

[1・3] 笠原氏による正一のその射撃 = 笠原氏による正一のその殺害

が導き出される。すると、[1・1]と[1・3]から、

[1・4] 正一が死ぬ3時間前に、笠原氏による正一の殺害があった。

が導き出されることになってしまう。この[1・4]は奇妙な表現である。なぜなら、本来であれば、正一が死ぬまで殺害（行為や事件）があったとは言えな

いように思われるからである。笠原氏が午前11時に（つまり、正一が死ぬ3時間前に）正一を銃で撃ったことは間違いない。しかし、正一は午前11時には死んでいないのだから、その時点で笠原氏が正一を殺してしまったと言うことは不適切だろう。このように考えると、デイヴィドソンの行為の同一性基準を反映している [1・3] が誤っていることを「殺害の時間の問題」が示しているように見えてこなくもない。

「殺害の時間の問題」の背後には、「同一の行為であるならば同一の時間領域を占めているのか」という疑問、「笠原氏による正一のその射撃 = 笠原氏による正一のその殺害なのか」という疑問、「いつ笠原氏による正一の殺害が起こったのか」という疑問の3つが横たわっている⁵。次節からは、「殺害の時間の問題」に対するトムソンの考えと、「殺害の時間の問題」を用いてなされたトムソンからの批判に対するデイヴィドソンの応答を取り上げる。その際に、ポイントとなってくるのが、それぞれの立場が上の3つの疑問にどのように答えるのかということである⁶。

1.2. 殺害は射撃よりも長い時間領域を占める射撃とは別の行為であるとする立場（トムソン）

「殺害の時間の問題」に対して、トムソンは、笠原氏による正一の殺害は、笠原氏による正一の射撃よりも長い時間領域を占めているので、笠原氏による正一の射撃とは別の行為であると主張する。トムソンによれば、笠原氏による正一の殺害は、笠原氏による正一の射撃や正一の死を含んでいることになる。トムソンの立場の背後には、同一の行為であるならば同一の時間領域を占めているという前提が隠れている。この前提から、笠原氏による正一の殺害と笠原氏による正一の射撃は占めている時間領域が異なるので、異なる行為であるという結論が導かれる。2つは異なる行為なので、同一性テーゼやそこから導出される [1・3] がこの立場では否定される。

この立場の問題点としては、「不自然」な進行形の使用が挙げられる。トムソンの考えに従えば、笠原氏による正一の殺害は、笠原氏による正一の射撃の終了後も進行することになる。すると、笠原氏は正一を撃ったあと、どこで何をしようとも、正一が死ぬまで、正一を殺していることになってしまう。あ

るいは、笠原氏が正一を撃ったあとになんらかの理由で死亡したとすると、正一が死ぬまで、笠原氏は死にながら正一を殺していたことになってしまう⁸。これらの帰結が看過できぬほどに不合理だとするならば、トムソンの立場は問題を抱えていることになる⁹。

1.3. 射撃と殺害は同じ行為であるとする立場（デイヴィドソン）

「殺害の時間の問題」に対して、デイヴィドソンは、[1・4]を容認し、射撃と殺害は同じ行為であると考え、たとえ、[1・4]が奇妙に聞こえるとしても「われわれの方から歩み寄る¹⁰」必要があると主張する。デイヴィドソンの立場において、射撃のあと、正一が死ぬまで「正一を殺した」と言うことができないのは、殺害が終わっていないからではなく、その射撃が殺害であったことを示す証拠をまだ手に入れていないからである。

デイヴィドソンは、「殺すこと」は「死を惹き起こす何かをすること」であると述べている¹¹。それに従えば、問題視されていた [1・4] は、

[1・5] 正一が死ぬ3時間前に、正一の死を惹き起こす笠原氏の行為があった。

となり、奇妙さが薄らいだように思える。しかし、奇妙さが薄らいだというこの事実はデイヴィドソンに対抗する立場を論駁するものではない。もしもデイヴィドソン陣営が自分たちの立場を更に擁護したいのであれば、奇妙さの払拭に努めるだけでなく、その奇妙さの由来を分析する必要があるだろう。

1.4. 柏端による「殺害の時間の問題」の奇妙さに関する分析¹²

問題視されていた [1・4] とは次のような文だった。

[1・4] 正一が死ぬ3時間前に、笠原氏による正一の殺害があった。

柏端の考えでは、[1・4]は2つの奇妙さを持っている。1つ目の奇妙さは、正一の死という結果から笠原氏の行為を記述しているという遡及性に由来するものである。この奇妙さは、他動的な動詞¹³一般に見られる健全な奇妙さである。

たとえば、柏端 (1997), p.140 には、他動的な動詞である「溶かす」を含んだ次のような例がある。料理長がコンロの上の鍋にチーズの塊を放り込み、コンロのスイッチを押して火をつけたとしよう。この時点ではまだチーズの塊は溶け始めていないので、料理長の一連の行為 (チーズの塊を放り込むことやスイッチを押すこと) を「チーズを溶かす行為」として記述することはできないだろう。スイッチを押してから数十秒経過し、チーズの塊が溶け始めてようやく数十秒前の料理長の行為を遡及的に「チーズを溶かす行為」として記述することが可能になる。

2つ目の奇妙さは、[1・4] の文が持つ曖昧さに由来するものである。射撃 = 殺害行為と考えているデイヴィドソンであれば、[1・4] を曖昧だとは思わないだろう。デイヴィドソンの立場に従って、[1・4] を正しく翻訳すると、

[1・6] ($\exists e_1$) ($\exists e_2$) ($\exists t$) (何かをした(笠原氏, e_1) & 時に(t , e_1) & 死んだ(正一, e_2) & 惹起(e_1 , e_2) & 時に($t+3$, e_2))

となる¹⁴。この [1・6] においては、正一の死という結果ではなく、殺害 (= 射撃) という行為だけが、正一が死ぬ 3 時間前に生起したと解釈されている (当然だが、正一は自分が死ぬ 3 時間前、つまり射撃 (= 殺害) された時点で死ぬことはない。なぜなら、殺害とはこれから死を惹き起こす何かをすることに過ぎないからである)。デイヴィドソンにとって [1・4] が曖昧さを持つことがあるとすれば、それはデイヴィドソンの立場とは無関係に、[1・4] を次のような [1・9] と混同しているときだろう。

[1・9] 正一が死ぬ 3 時間前に、笠原氏は正一を殺した。

デイヴィドソンにとって「笠原氏が正一を殺した。」という文は「笠原氏による正一の殺害が起こった。」という文と違って多義的である。この多義性も他動的な動詞 (ここでは「殺す」) を含む文が一般に持つ多義性にほかならない。「笠原氏が正一を殺した。」という文に、「t 時に」という副詞的修飾語が付け加わったとき、「t 時に」は何を述定しているのだろうか。笠原氏の殺害行為を述定

しているのだろうか。それとも、正一の死という結果の方を述定しているのだろうか。あるいは、その両方を述定しているのだろうか。この他動的な動詞の多義性は日常においても姿を現すことがあるし、場合によっては切実なものでさえある¹⁵ (たとえば、「11月30日までに原稿を郵便で送ってください」と依頼されたが、他の仕事にかこつけていて締め切り目前なのに原稿の執筆が一向に進んでいない。そんなとき、あなたは、他動的な動詞が多義的なのを良いことに、依頼の内容を、送った結果が、つまり原稿が相手の所に届くのが30日だとは解釈せずに、送る行為が、つまりポストに投函するのが30日だというふう

に解釈し、執筆のために日数を稼ぐことが可能ではある¹⁶)。そのため、[1・4]が、正一が死ぬ3時間前に生起したのは笠原氏による殺害行為という出来事だけであった(したがって、正一の死は、射撃の時点では起こっていない)ということを表わしているのに対して、[1・9]は次の[1・10]を表わしているようにも読めてしまう。

[1・10] $(\exists e_1)(\exists e_2)(\exists t)$ (何かをした(笠原氏, e_1) & 時に(t, e_1) & 死んだ(正一, e_2) & 時に(t, e_2) & 惹起(e_1, e_2) & 時に($t+3, e_2$))

この[1・10]は偽である。なぜなら、[1・10]は、正一が死ぬ3時間前に、笠原氏による殺害行為という出来事とともに、その結果である正一の死という出来事も生起したと解釈してしまっているからである。柏端に従えば、[1・9]を、デイヴィドソンの立場と無関係に[1・10]のように読んでしまうことが不合理なのであって、デイヴィドソンの立場自体が不合理なわけではないということになる¹⁷。

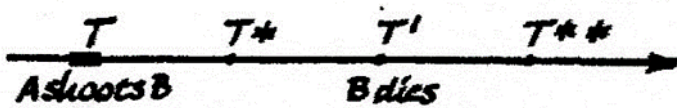
2. 「殺害の時間の問題」再考

2.1. トムソンが示した「殺害の時間の問題」

本節では、「殺害の時間の問題」を主題的に取り扱う(“The Time of a Killing”という論文のタイトルからも明らかであると思うが) Thomson (1971a) を取り上げることによって、トムソンがどのように「殺害の時間の問題」を提示して

いるのかを、そして「殺害の時間の問題」を用いて、どのようにデイヴィドソンを批判しているのかをテキストに即して確認していく。もちろん、本節の主眼はトムソンの主張全体を事細かに追うことにはない。

トムソンの問題意識は明確である。トムソンは、なぜ射撃と殺害を同一視することができるのかと問い、同一視することはできないだろうと結論づける。トムソンは、基本的に、以下の図を用いて議論を進めていく¹⁸。



この図で注目すべきポイントは、 T^* と T^{**} という時点が明記されていることだろう。

トムソンは、図のような事例において、射撃と殺害を同一視することによって生じる問題を3つ挙げている¹⁹。ここでは、2つ目の「日付の問題 (the date problem)²⁰」を取り上げる。 T^{**} において「 T でAによるBの射撃が起こった」は真であるが、 T でBは死んでいないので、 T^{**} において「 T でAによるBの殺害が起こった」は偽である。このとき射撃と殺害を同一視しようとする、射撃は「 T で起こった」という性質を持っているのに、殺害は「 T で起こった」という性質を持っていないので、同一視することはできない。よって、射撃と殺害を同一視することが誤りであるというのが「日付の問題」である。

トムソンは、射撃と殺害を同一視すること (デイヴィドソンの立場) が誤っていると証明することはできないが、奇妙な印象を受けると主張し、「殺害する」という動詞について、「溶かす」などの動詞と比較しながら考察する²¹。そして、トムソンは、デイヴィドソンの立場に対して、射撃と殺害を同一視することを支持する事実をより多く示すことを求める。したがって、デイヴィドソンは、AがBを撃ったあとに何もしなくてもBが死ぬという事実や、あなたがAがBを撃った現場を目撃したのならAがBを殺害するのを目撃したと後で言うことができるという事実以外に、射撃と殺害を同一視することを支持する事実を更に示すことを要求されている。

トムソンは、殺害が T から T' までの間、つまりAがBを撃ってからBが死

ぬまでの間、行われていたと考える。トムソンは「A による B の殺害の開始時間 (the time of initiation of A's killing of B)²²」という用語と「A による B の殺害の完了時間 (the time of completion of A's killing of B)²³」という用語を導入する。そして、「t の間に A は B を殺す」が真なのは、t の間に「A による B の殺害の開始時間」と「A による B の殺害の完了時間」が含まれているとき、かつそのときに限ると分析する。

2.2. 柏端による「殺害の時間の問題」の奇妙さの払拭に対する トムソンの評価

1・4 節で確認したように、柏端は「午前 11 時に笠原氏は正一を殺した。」という文の奇妙さを払拭するために、午前 11 時の時点では正一の死という結果まで起きてはおらず殺害行為 (笠原氏が指を曲げること) だけが起きていたこと (他動性の観点) と、正一の死という結果から振り返って指を曲げることが「殺害」と記述されていること (遡及性の観点) を指摘する。そのような柏端の指摘それぞれについて、トムソンはどのように評価しうるだろうか。本節では、2・1 節で見たトムソンの主張に基づきながら、トムソンが柏端に対してなしているであろう評価を示し、そのような評価がいかなる帰結をもたらすことになるかを明らかにする。

2.2.1. 柏端による遡及性という観点からの分析と それに対するトムソンの評価

柏端は「午前 11 時に笠原氏は正一を殺した。」という文の奇妙さを払拭するために、まず、遡及性という観点から、笠原氏が指を曲げることが正一の死という結果から振り返って「殺害」と記述されていることを指摘する。柏端の立場は、「午前 11 時に笠原氏は正一を殺した。」という文が正一が死ぬよりも前に真だと分かるというようなとんでもない主張をしているわけではない。正一が死んだ後から振り返ってみれば「午前 11 時に笠原氏は正一を殺した。」という文が真だったことが分かったと主張しているだけなのである。

このように遡及性という観点から分析することによって「午前 11 時に笠原氏は正一を殺した。」という文の奇妙さを払拭することができたという柏端の主張

についてトムソンはどのように評価するだろうか。2・1節の「日付の問題」のところでも確認したように、トムソンは柏端のこのような主張に納得しない。トムソンであれば、たとえ正一が死んだ後から振り返ったとしても、「午前11時に笠原氏は正一を殺した。」は偽のままだと主張するだろう。トムソンは、午前11時には正一が死んでいないことを理由に、笠原氏が正一を撃ったことと笠原氏が正一を殺したことを同一視しない。トムソンにとっては、たとえ結果から振り返っていたとしても、「殺した」瞬間にその行為の結果（被害者の死という結果）も一緒に起こっていなければ奇妙に感じられるのである²⁴。

このとき注意しなければならないのは、トムソンが納得していないのは、奇妙さが払拭されたとする柏端の分析結果の方であって、遡及性という観点に基づく分析方法それ自体ではないということである。トムソンにとっては、たとえ正一の死という結果から振り返っていたとしても、笠原氏が指を曲げたことを「殺害」と記述すれば、指を曲げた瞬間に正一が死んだような印象を受けるので、依然として奇妙さが残っているように感じられるのである。ただし、トムソンは正一の死という結果から振り返って行為を記述すること（遡及性という観点に基づく分析方法）それ自体に関しては自身の立場を明言してはいない。つまり、トムソンは正一の死という結果から振り返って行為を記述するという遡及性に対して賛成することも反対することもできるのである。

そこで、トムソンが遡及性に対して賛成する場合と反対する場合に分け、それぞれの場合がどのような帰結をもたらすかを見てみることにしよう。そのような作業を通じて、トムソンの立場の輪郭がより一層はっきりしてくるだろう。

トムソンが遡及性に反対しているとしよう。このとき問題となってくるのが、正一が死ぬかどうか分からないのに、なぜトムソンは遡及性を使わずに「午前11時に笠原氏は正一を殺し始めた」と言えるのかということである。ここでポイントとなってくるのが、デイヴィッドソン（柏端）とトムソンの立場は一見そう見えるほど対立してはいないということである。つまり、トムソンが抱える問題をデイヴィッドソン（柏端）も抱えることがあるということである。トムソンが抱える「なぜ午前11時に笠原氏は正一を殺し始めたと言えるのか」という問題と同じ問題を、すなわち「なぜ午前11時に笠原氏は正一を殺したと言えるのか」という問題をデイヴィッドソンも抱えている。ただし、柏端は遡及性を

認めているので、デイヴィドソンが抱えている「正一が死ぬかどうか分からないのに、なぜ午前11時に笠原氏は正一を殺したと言えるのか」という問題に対して、「正一の死後から振り返っているので、午前11時に笠原氏が指を曲げたことが殺害行為であったことが分かるのだ」と答えることができる。それでは、トムソンは、正一の死後から振り返ることなしに、何を根拠に「午前11時に笠原氏は正一を殺し始めた」と言えるのだと主張するのだろうか。ここでは考えうる2つの根拠を示し、吟味してみたい。まず第1に、意図を根拠に、トムソンは「午前11時に笠原氏は正一を殺し始めた」と言えるのだと主張するかもしれない。つまり、トムソンは、「午前11時に笠原氏は正一を殺し始めた」は、午前11時に笠原氏に正一を殺す意図がありさえすれば、たとえ正一が死ななかつたとしても真であると主張するかもしれない。しかし、私には少なくとも行為の成立のために意図があることは十分でもなければ必要ですらないように思われるし²⁵、そもそも私には「意図する」ということが「正確」に（哲学的な議論に耐えるほどの正確さで）どのようなことなのかさえ分かっていない。それでは、「意図」という概念に訴える以外の方法として他にどのようなものがあるだろうか。たとえば、トムソンは「殺し始めた」という語が被害者の死という結果を含意してはいないと考えることによって、午前11時の時点で正一が死ぬかどうか分からなくても、「午前11時に笠原氏は正一を殺し始めた」と言えるのだと主張するかもしれない。しかし、「殺し始めた」のに「殺せ」なかつたということなどありはするのだろうか²⁶。もしそのようなことがないとすれば、「殺し始めた」は「殺した」ことを含意する。そのとき「殺す」が被害者の死を含意するのであれば、「殺し始めた」も被害者の死を含意してしまうことになる。トムソンは、「殺し始めた」という語が被害者の死を含意しないということ的前提にしたければ、「殺し始めた」が「殺した」を含意することを否定するか、「殺す」が被害者の死を含意することを否定しなければならないだろう。

次に、トムソンが遡及性に賛成しているとしよう。この場合、遡及性に反対している先程の場合とは違って、トムソンは、正一の死という結果から振り返って、午前11時に笠原氏は正一を殺し始めていたと主張することができる。このように遡及性を認めたとしても、デイヴィドソンに対するトムソンの批判は依然として有効なままである。トムソンの批判のポイントは、「午前11時に笠

原氏は正一を殺した」という文を聞くと、どうしても午前 11 時の時点で正一がすでに死んでしまっているような印象を受けるので奇妙であるということだった。正一の死という結果から振り返っていたとしても、「午前 11 時に笠原氏は正一を殺した」という文を聞けば、やはり午前 11 時の時点で正一がすでに死んでしまっているような印象を受けてしまうということである²⁷。

以上、遡及性という観点から分析することによって「午前 11 時に笠原氏は正一を殺した。」という文の奇妙さを払拭することができたと柏端が主張することについてトムソンがどのように評価しうるかを、トムソンが遡及性に反対する場合と賛成する場合に分けて考えた。

2.2.2. 柏端による他動性という観点からの分析と それに対するトムソンの評価

柏端は、「午前 11 時に笠原氏は正一を殺した。」という文の奇妙さを払拭するために、遡及性という観点だけでなく、他動性という観点も用いていた。以下では、柏端が、他動性という観点をを用いて、「午前 11 時に笠原氏は正一を殺した。」という文の奇妙さをどのように払拭したと主張しているのかを確認し、それについてトムソンがどのように評価しうるかを考えていこう。

柏端は、「殺す」のような他動的な動詞が殺害行為と殺害結果の両方を指示し曖昧であることを指摘していた。そして、「午前 11 時に笠原氏は正一を殺した。」という文が奇妙に感じられるとすれば、それは、柏端に言わせれば、動詞「殺した」が午前 11 時の時点で殺害行為が起こっているということを表わしているだけでなく、午前 11 時の時点には存在しない正一の死という殺害結果が起こっているということまで表わしていると誤って解釈しているからである。「午前 11 時に笠原氏は正一を殺した。」という文が指示する正一の死という殺害結果は午後 2 時に存在しているのであって、午前 11 時には存在しないと考えれば、「午前 11 時に笠原氏は正一を殺した。」という文の奇妙さは払拭されると柏端は考えている。

このように他動性という観点から分析することによって「午前 11 時に笠原氏は正一を殺した。」という文の奇妙さを払拭することができたという柏端の主張について、トムソンはどのように評価するだろうか。トムソンが「殺す」とい

う行為は身体動作と結果の両方を含んでいると考えているのに対して、柏端は「殺す」という行為は身体動作だが、「殺す」という語が曖昧なために、行為の結果まで指示してしまうことがあると考えている。トムソンの立場であっても、「殺す」という語は身体動作から始まって結果で終わる行為それ自体を指示できるだけでなく、身体動作を指示することもできると主張することは可能だろう（もちろん、そう主張しないことも可能である）。ただし、トムソンの批判のポイントは、「午前 11 時に笠原氏が正一を殺した」という文を聞くと、どうしても午前 11 時の時点で正一がすでに死んでいるような印象を受けるので奇妙であるということだった。だとすれば、トムソンにとって問題なのは、「殺す」という語が「t 時に」によって述定されるときには、殺害行為も殺害結果も「t 時に」起こったように感じられるということなのである。したがって、トムソンは、他動性という観点をういた柏端の分析に対して、次のようにコメントするだろう。「殺す」という語が何を指示しているか曖昧であったとしても、「t 時に」は身体動作と結果の両方を述定するのだと。

2.3. 動詞と行為の関係

トムソンの批判のポイントは、「午前 11 時に笠原氏は正一を殺した」という文を聞くと、どうしても午前 11 時の時点で正一がすでに死んでいるような印象を受けるので奇妙であるということだった。そこで、トムソンは、デイヴィドソンらが前提とする「射撃 = 殺害」という外延的な同一性が成り立つことを認めず、代わりに「射撃の開始 = 殺害の開始」という外延的な同一性を認めることによって、「午前 11 時に笠原氏は正一を撃った。」という文から、午前 11 時の時点で正一がすでに死んでいるような印象を与えない「午前 11 時に笠原氏は正一を殺し始めた。」という文を導くのであった²⁸。

しかし、「午前 11 時に笠原氏は正一を殺した。」という文が奇妙に感じられるということを根拠に、「射撃 = 殺害」という外延的な同一性を拒否することはできるだろうか。そもそも「射撃 = 殺害」という外延的な同一性を想定することなど可能なのだろうか。もし「射撃 = 殺害」が想定できるとすれば、そのときには少なくともすべての動詞が行為という世界の存在者と対応しているということが前提にされているからだろう。たとえば、「殺す」という動詞は殺

すという行為に、すなわち、デイヴィドソンの場合には身体動作に、トムソンの場合には身体動作から結果までに対応していると想定されている。だが、必ずしもそのように想定する必要はない。たとえば、「殺す」という動詞は、加害者が被害者に死を惹き起こすような何かをし、その何かが原因となって被害者が死んだという一連の出来事を指示しているのであって、その一連の出来事は行為ではないと考えることは可能だろう。そのように考えることができれば、そもそも「殺す」という行為など探す必要がなくなるのではないだろうか。すべての動詞と、世界における行為という存在者とが対応していると考えする必要はない。「指を曲げる」や「殴る」などのタイプの動詞には行為という存在者が対応しているように感じられるが、それと同じように「殺す」などのタイプの動詞に対応する行為を探す必要があるのだろうか。「殺す」という動詞に対応する存在者としての行為などありはしないと考えるのであれば、外延的な同一性である「射撃 = 殺害」も成り立たなくなり、「午前 11 時に笠原氏は正一を殺した。」という奇妙な文が導出されることもなくなるだろう。

3. 結語

本稿では、デイヴィドソニアンである柏端が行為を身体運動とみなすことから生じる奇妙さを払拭しようとしたことについてトムソンがどのように評価しているのかということを示した。第 1 章では、柏端が、「殺す」という動詞が殺害行為と被害者の死という結果の両方を指示しているということと、死という結果からある行為を殺害と記述しているということを指摘することによって、「殺害の時間の問題」の奇妙さを払拭しようとしていることを示した。2・1 節では、デイヴィドソンと対立するトムソンの立場を紹介し、それをもとに、2・2 節ではトムソンが、柏端の奇妙さ払拭の試みを受けてもなお、「殺害の時間の問題」は奇妙だと主張し続けることを示した。最後の 2・3 節では、行為という存在者と対応していないような動詞が存在する可能性を示唆した。

本稿では、「殺害の時間の問題」に絞って考察したので、その背景に広がる行為論全体の議論やデイヴィドソンの真理条件意味論のプログラムなどについて触れることができなかった。そもそもデイヴィドソンが提案した、クワインと

同じく一階述語論理にこだわった行為文の論理形式は、真理条件意味論のプログラムを念頭に置いている。ただ、本稿で展開されたいくつかの考察は真理条件意味論のプログラムから切り離して独立に展開することが可能だとは思ふ。詳しく論じることはできなかったが、現在の哲学研究の流れとの関わりでいえば、本稿は哲学の議論とはどのようなものなのか（何をもって哲学的議論の決着とするのか）ということや哲学的議論において直観はどのような役割を果たすのかということを示している。

哲学における極端な議論や行き詰まった議論は、しばしば無駄な穴掘りにたとえられることがあるが、道の先にあいた穴がふさがれずに残されているからこそ（それ以上議論を続けようとしても行き止まることが分かっているからこそ）安心して道の途中で立ち止まることができるのだと思う（ふさがりそうもない穴をきれいに埋めてみせる論文も良い論文だとは思ふが）。本稿も先哲があげた穴に随分助けられながらようやくここまで辿り着いた。いや、先哲だけでなく多くの方々にいろいろなことを教えていただいた。本稿のあちこちに仕掛けておいた穴を見るたびにその方々たちの顔が浮かんでくる。その穴ぼこたちの間に自分もひとつくらい新しい穴をあけることができれば良いなと思う。

註

1. 柏端 (1993) にもとづく *id.* (1997), pp.125-144 も参照した。
2. *ibid.*, p.126.
3. 引用元の *ibid.* では、本文中の「射撃」という表現が「狙撃」という表現になっている。「狙撃」と表現すると、笠原氏がまるでスナイパーであるかのような印象を与えてしまう（海外で議論されていたときに挙げられていたのはスナイパーによる狙撃の例だが、『サーカスの怪人』にそのような設定はない）。そこで、本稿では、「狙撃」という表現の代わりに、「銃から弾を発射する」という意味で「射撃」という表現を用いた。
4. 「よって」には、同一性テーゼにおける「よって」とは異なる用法が存在することが、*ibid.*, pp.31f など指摘されている。たとえば、「正一は笠原氏によって殺された。」という受動形を含む文における「よって」は行為者を表わすために用いられている。一方で、「ボールがぶつかったことによって、窓ガラスが割れた。」という文における「よって」は因果関係を表わすために用いられている（ちなみに、この用法の「よって」のときには、2つの主語、ここでは「ボール」と「窓ガラス」が登場する）。
5. 正確にいつどこで行為が起こったのかということは実践的な場面でも問題になることがある。R・ヒルピネンが紹介している例では、ニューヨークで殴打された被害者がニ

ニュージャージーで死亡した事件についてニュージャージー州の裁判所は犯行が州外でなされたとして裁判権を放棄したが、類似の事件についてノースカロライナ州の裁判所は犯行が州内でもなされたとして裁判権を行使した。裁判官は良き市民の代表であって、幸か不幸か形而上学者ではないのだから、病的なほど神経質に一貫性を要求したりはしないだろうし、されもしないだろう。それでも司法全体である程度の一貫性が要求されることがあれば、そのときには哲学者の出番があるかもしれない。詳しくは、*id.* (1999) を参照されたい。日本においては、たとえば時効に関連して、いつ行爲が起こったのかということが実践的な場面で問題になるかもしれない。

6. それぞれの主張を細かく見ていく前に、それぞれの立場が3つの疑問に対してどのように答えるのかをあらかじめ表で示しておくことにしよう。哲学の論文を推理小説などの物語に比して考えている読者からすれば、このような註はお節介なネタバレにあたり、いきなり真犯人を告げられてしまったときのようにがっかりされるのかもしれない。しかし、私にとって哲学の論文は迷路のように複雑で、本筋を辿るだけでもかなりの忍耐と慣れを必要とするものなので、この表がささやかな地図となって読者が議論の全体像を掴む際の助けになればと思い、この表を付すことにした。

	同一の行為であるならば同一の時間領域を占めている	笠原氏による正一のその射撃 = 笠原氏による正一のその殺害	いつ笠原氏による正一の殺害が起こったのか
トムソン	○	×	午前 11 時から午後 2 時まで
デイヴィッドソン	○	○	午前 11 時

7. *id.* (1993), p.119 では、トムソンの他に L・デイヴィスが挙げられている。
8. *id.* (1997), p.132 では、トムソンの立場が抱えるもう 1 つの問題点が挙げられている。しかし、私にはその問題点がトムソンに対する適切な反論になっているとは思えないので、本文中では紹介しなかった。
9. トムソンの立場からの応答としては美濃 (1997) などを参照されたい (美濃正自身はみずからの立場をトムソンの的であると明言してはいないが)。
10. Davidson (1969), p.177. [邦訳 p.253.] 柏端 (1993), p.121 は、私訳を用いて「われわれの方から歩み寄る」と表現している。
11. Davidson (1971), p.58. [p.86.]
12. 美濃 (2000), pp.75ff は、柏端に対して、奇妙さの由来を分析するというのであれば、柏端以外の立場も受け入れることができるように一般化した形で行うべきだと (柏端自身の立場を前提として議論すべきではない) と異議申し立てを行っている。
13. 柏端 (1997), p.67 は、他動詞とは異なるものとして、「他動的な動詞」を導入する。「他動的な動詞」の定義は以下の通りである (*loc. cit.*)。

「x は y を ϕ した」における動詞「 ϕ した」が他動的であるのは、「x が y を ϕ した」と記述可能な x の行為が存在し、かつそれだけでなく「y が x に ϕ されたこと」と記述可能な出来事が y に起こり、かつ前者が後者を惹き起こしたときであり、そのときに限る。

このような定義によって、一般に他動詞に分類される知覚動詞 (たとえば「見る」、

「聞く」、「認める」)などは、「他動的な動詞」からは排除される。なぜなら、たとえば「見る」の場合、「xがyを見たこと」と記述可能な行為xが存在するとき、「yがxに見られたこと」と記述可能な出来事がyに起こってはいないからである。

- ¹⁴ *ibid.*, pp.122f.には、以下のようなコメントがある。Davidson (1967) が行為文の論理形式について述べたことと [1・6] は異なっているのではないかと指摘されるかもしれない。たしかに、*ibid.*に文字通りに従うと、たとえば「笠原氏が正一を殺した。」という文は以下のようになる。

[1・7] (∃e) (殺した(笠原氏, 正一, e))

しかし、デイヴィッドソンは「殺害」を「死を惹き起こす何かをすること」だと考えているのだから、[1・7] のようではなく、次の [1・8] のように表現すべきなのである。

[1・8] (∃e₁) (∃e₂) (何かをした(笠原氏, e₁) & 死んだ(正一, e₂) & 惹起(e₁, e₂))

[1・6] は、この [1・8] のような考え方に基づいて表現されている。

- ¹⁵ 柏端 (1997), p.136.
- ¹⁶ 「殺す」と「送る」を類比的に考えてもよいのか(「殺す」は行為の結果に、「送る」は行為の遂行に重点があるように思われる。「手紙を送ったのに届かなかった」という文は自然だが、「正一を殺したのに死ななかった」という文は不自然である)、あるいは他動的な動詞一般にまで話を拡張してよいのかということについては慎重に考える必要があるだろう。
- ¹⁷ 野矢 (1999) は、「殺害の時間の問題」に対して、殺害が意図的である場合はトムソンの立場をとり、殺害が意図的でない場合はデイヴィッドソンの立場をとっている。そのため、野矢茂樹の立場にとっては、意図的行為の基準が中心的な問題となってくる。*ibid.*では、意図的行為の基準をめぐる、野矢と信原幸弘の間で攻防が繰り広げられている。
- ¹⁸ Thomson (1971a), p.116. 神経質な読者はお気づきだろうが、図のなかで、Tは点ではなく、幅のあるしみ(blotch)になっている。トムソンは、この幅によって、誰かを撃つことには時間がかかるということを表現したと述べている。さらに神経質な読者は、それなら、死ぬことも時間がかかるのだから、図のように点ではなく、幅のあるしみで表現すべきだったのではないかといぶかしがるかもしれない(一方で、死は瞬間なので、図のように点で表現すべきなのだ、図のことを支持する読者もいるかもしれない)。トムソンによれば、目下の議論にはあまり影響がないので死を点で表現したとのことである。
- ¹⁹ *ibid.*, pp.118f.
- ²⁰ *ibid.*, p.118.
- ²¹ 「殺害する」、「溶かす」などの動詞は、それぞれ「死なせる(cause to die)」、「溶かさせる(cause to melt)」と分析され、「因果関係を示す動詞(causal verb)」と称されることがある。しかし、*ibid.*, p.122は「殺害する」と「死なせる」ことは異なると主張する。たとえば、私が笠原氏をけしかけて正一を殺させたとしよう。このとき、私は正一を「殺害し」てはいないが、正一を「死なせ」はした。つまり、このときの私は正一の死の単なる原因に過ぎないのである。
- ²² *ibid.*, p.123.

^{23.} *loc. cit.*

^{24.} *ibid.*, p.121 では、「殺害する」のほかに「爆破する」が挙げられている。たとえば、爆弾犯が時限爆弾のタイマーを起動させ、30分後に時限爆弾が爆発したとしよう(ポイントをより明確にするために、トムソンの例とは若干異なっている)。行為を身体運動であると考えたデイヴィドソンは爆弾犯が時限爆弾のタイマーを起動させた時点で時限爆弾を爆発させたと考えなければならない。しかし、トムソンにとっては、デイヴィドソンのように考えると、時限爆弾があたかも2度(タイマーを起動させた時点と、それから30分後に爆弾が爆発した時点の2度)爆発したかのように感じられるのである。

^{25.} たとえば、笠原氏が正一を殺すことを意図していても、実際には(手違いか見間違いか何かで)ミヨ子を殺してしまうことがありうるので、笠原氏によるミヨ子の殺害という行為が成立するためには、笠原氏がミヨ子を殺すという意図を持っているだけでは十分ではない。それどころか、この例の場合、笠原氏はミヨ子を殺すという意図を持たずにミヨ子を殺したので、笠原氏によるミヨ子の殺害という行為が成立するためには、笠原氏がミヨ子を殺すという意図を持つことは必要でずらい。詳しくは、柏端(1999), pp.31ffを参照されたい。

このような主張に対して、アンスコム-デイヴィドソン路線の「ある記述の下で」という観点から、次のように反論されるかもしれない。この例で、笠原氏がミヨ子を殺すという意図を持たずにミヨ子を殺したが、ミヨ子を殺すという実際の行為に対して笠原氏は何の意図も持っていなかったわけではなく、正一を殺すという意図を持っていたのではないかと反論されるかもしれない。

たしかに、ここで言われている「意図」のようなものが行為の成立のために必要であるかもしれないが、そのような「意図」が実際の行為とどのような関係にあるかは依然としてはっきりしないままである。ただ、笠原氏によるミヨ子の殺害という行為が成立するためには、笠原氏がミヨ子を殺すという意図を持っている必要もなければ、それだけでは十分でもないことは確認できたと思う。

^{26.} たとえば、「渡る」という語の場合には、「横断歩道を渡り始めた。」(あるいは「横断歩道を渡っていた。」)は「横断歩道を渡った。」を含意しない。しかし、「渡る」と同じことが、程度を許さない死(「死にかける」は比喩であって、微妙に死んだりすることを含意してはいない)という結果に関わる「殺す」という語の場合には成り立たないように私には思われる(少なくとも日本語では)。

しかし、次のように反論されるかもしれない。殺人未遂のような例は、まさに殺し始めたけれども、死なない例ではないのかと。このような反論に対して、私は次のように応答したい。殺人未遂の例において、殺人犯がしている行為は、「殺そうとすること」ではあっても、「殺している」ことではない。したがって、殺人未遂の例において、殺人犯が「殺し始める」ことはない。「殺そうとすること」が成り立つためには、被害者の死は必要ないが、「殺すこと」が成り立つためには、被害者の死が必要であるように私には思われる。したがって、私は、ある行為を「殺害」と正確に記述するためには、適及的な仕方ではしか記述できないだろうと考えている。

^{27.} このとき注意しなければならないのは、適及性に賛成したからといって、正一が死ぬかどうか分からなくても意図を根拠に「午前11時に笠原氏は正一を殺し始めた」と言えるのだと主張できなくなるわけではないし、「殺し始めた」という語は正一が死ぬことを含意しないと考え、午前11時の時点から「午前11時に笠原氏は正一を殺し始めた」と言えるのだと主張できなくなるわけでもないということである。すなわち、

遡及性に賛成したからといって、正一の死という結果が起こる前から、ある行為を殺害として記述することに反対したことにはならないのである。

- ²⁸ Thomson, *op. cit.*, pp.128ff は、デイヴィドソンのように「射撃 = 殺害」という外延的な同一性が成り立っていると考えたとしても、「ある行為の完了時間」は内包的なので、「射撃の完了時間」と「殺害の完了時間」は置換することができず、「午前 11 時に笠原氏は正一を撃ち終わった。」から「午前 11 時に笠原氏は正一を殺し終わった。」を導くことができないと主張することは可能ではあると述べている。トムソンは、「射撃 = 殺害」という外延的な同一性をすぐさま捨て去る必要がないことに気づいていた。

参考文献

- Anscombe, G. E.M. (1963), *Intention*, 2nd ed. Basil Blackwell. (『インテンション』, 菅豊彦訳, 産業図書, 1984 年.)
- Davidson, D. (1963), “Actions, Reasons, and Causes”, in Davidson (1980), 3-19.
- (1967a), “The Logical Form of Action Sentences”, in Davidson (1980), 105-148.
- (1967b), “Causal Relations”, in Davidson (1980), 149-162.
- (1969), “The Individuation of Events”, in Davidson (1980), 163-180.
- (1970), “Mental Events”, in Davidson (1980), 207-225.
- (1971), “Agency”, in Davidson (1980), 43-61.
- (1980), *Essays on Actions and Events*, Oxford U. Pr. (『行為と出来事』, 服部裕幸・柴田正良訳, 勁草書房, 1990 年.)
- Davis, L.H. (1970), “Individuation of Actions”, *Journal of Philosophy* 67, 520-530.
- Fang, W-C. (1985), *A Study of Davidsonian Events*, Institute of American Culture.
- 柏端達也 (1993), 「殺害の時間の問題—出来事に関する D・デイヴィドソンの見解をめぐるある論争について」, 『年報人間科学』 14, 117-130.
- (1997), 『行為と出来事の存在論—デイヴィドソンの視点から』, 勁草書房.
- (1999), 「行為と進行形表現」, 『年報人間科学』 20, 15-42.
- 美濃正 (1997), 「行為とは単に身体を動かすことにすぎないか?—アンスコム—デイヴィドソンの単一被記述項説の批判的検討」, 『人文研究』 49. 3, 61(177)-80(196).

- (1999), 「行為とはどのような存在者か?—行為と身体運動再考 (上)」, 『人文研究』 51. 1, 23-39.
- (2000), 「行為とはどのような存在者か?—行為と身体運動再考 (中)」, 『人文研究』 52. 1, 65-91.
- (2001), 「行為とはどのような存在者か?—行為と身体運動再考 (下)」, 『人文研究』 53. 1, 47-62.
- 野矢茂樹 (1999), 「行為とできごとに関するいくつかの所見」, 『哲学・科学論叢』 1, 39-78.
- (2010), 『哲学・航海日誌Ⅱ』, 中公文庫.
- Pols, A.J.K. (2013), “Choosing your poison and the time of a killing”, *Philosophical Studies* 165, 719-733.
- Thomson, J. J. (1971a), “The Time of a Killing”, *Journal of Philosophy* 68, 115-132.
- (1971b), “Individuating Actions”, *Journal of Philosophy* 68, 774-781.
- Weintraub, R. (2003), “The time of a killing”, *Analysis* 63, 178-182.